

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成20年11月5日発行(毎月5日1回発行)
第48巻11月号(通巻592号)

風土



水の秋
神蔵器

名月や影のぼりゆく神楽坂

死ねば行く星の一つに水の秋

数珠玉の仕上にかかる風の吹く

あそびまだ足らざる蛇の穴に入る

ジンジャーの花鷗外の遺言書

義経の墓遠巻きにらせん稲架
赤のままてつぼう水を怖れけり
目的のなき旅にあり曼珠沙華
分け入つて翁とならむ芒原
栗拾ふ大友皇子の墓の前
秋蝶や大地のくぼに翅を立て
まぼろしの戦艦大和稲の花



竹間集

同人作品



終戦日

斉藤 小夜

帰らずと云ひて出し夫終戦日
水遣りの先づは朝顔団十郎
くらげ浮く朝の海の透きとほり
盆箆に鯛七本頭をそろへ
初蟬きく夕餉仕度の手をとめて
早稲穂波北国越後なつかしき
カンナ燃ゆ下校の子等の声はじけ

残 暑

徳丸 峻二

日時計の回りきつたる蜻蛉かな
月曜の手や早稲の香の残りある
門標の上に猫の目星明かり
十六夜の机鳴らしてナイフ研ぐ
鬼ごつこの鬼がつまづく曼珠沙華
終戦日五人の孫に囲まれて
湾生「湾生」は台湾生れを言ふ。の我に厳しき残暑かな

八 月

宮川みね子

八月の雑書の中におぼれけり
八月の沖雲にある余熱かな
しろがねの雨粒見ゆる原爆忌
雷鳴にシヨパンの曲のとぎれけり
森がふくらむつくつくほふつくほふし
青き実の紫式部西鶴忌
八月や剥落はいまはじまりぬ

燈籠流し

浜 福恵

日焼子の長脛祖父に似たりしか
つくつくほふしほふしこひしと夕暮るる
樹齡八百年の木下や穴まどひ
丹波路は雲の通ひ路豆を引く
御開帳の秋を聳ゆる大銀杏
夫の名を点し燈籠流しかな
流燈会黒子のごとく躑みぬて

稲びかり

鈴木とおる

よく食うてよく働いて生身魂
弔文をしたためをれば夜の雷
迎火の糸のころ草を刈つて干す
顔を見るだけの面会夜の秋
新涼や下駄に乗せたる足の裏
かぶと虫の櫟の瘤は秘中の秘
稲びかり仏間大きく開けておく

晩夏の夕日

外川 玲子

川舟を待つ間新蕎麦打ちにけり
最上川
山暮れて闇をひつばる藪からし
いつまでも吹かれて風船蔓かな
八月の双手さみしき観覧車
虚子庵に秋風を知るはるかかな
路地裏に晩夏の夕日すべり込む
また母が遠くなりゆく桐一葉

朝 顔

山田 暢子

夏書あと烈しき雨となりにけり
神の木に会ふまで登る夏帽子
八月の寝転ぶための畳かな
稲妻にまた手を止めて夕仕度
炎天をまつすぐに来て母の家
稲妻の行方や未完のままの稿
朝顔へ夫を乗せたる車椅子

夜の音

— 山田 暢子 —

神の辺に来て爽やかに祓はるる
湯殿山ばつたに先を越されけり
爽やかに踏みて楔の石熱し
水の秋人形貼りて岩供養
梵字川澄みたる空を流しけり
鯛雲何か忘れてゐしこころ
霧襖へだてて蔵王地蔵尊
火口湖の一気に霧の湖となる
黄に燃ゆる庄内平野鳥渡る
夜の音となる山の音秋深し

山河集

同人作品



神蔵
器選

鉦彫の瑠璃光如来秋澄めり
天野みゆき

葛の花岩殿山に鍛垂れ

岳下り御射山祭の人となる

草庵をとり開みたる曼珠沙華

大口護符貼りたる山家小鳥来る

北島 和装

一呼吸置いて踏み出す夏の暮

陽を掬ふシャベルの先に秋の風

始まりはサヨウナラから秋の蟬

ガスコンロ火の透き通る九月かな

校庭に並ぶバケツの稲たわわ

柿沼 盟子

顎あげて墓の踏ん張る小径かな

親離れ遅き二番子今朝の秋

底紅や膝つきて切る母の爪

石仏の欠けたる肩へ花芒
半鐘のなき望楼や一葉落つ

建具屋の鑿巻きしまふ日雷
鈴木 庸子

建直す校舎にクレーン雲の峰

一般車入れぬ林道赤とんぼ

現世にをのくからすうりの花

まづ一杯水を飲みほす帰省かな

大寺の一木一草いなびかり
柴田 久子

井戸の水へこませて吊る大西瓜

一葉落つ骨董市の大皿に

美しき手のひらひらと阿波踊

阿波踊雨の中より豪雨来て

山 里

高村 令子

初鶯野川の空の潤みそむ
木々芽吹く真只中に人造湖
辛夷咲き私語の始まる雑木山
先ぶれの風来て木の芽しぐれかな
初蝶や野山楽しくなつて来し
まつさきに地の輝きの鼓草
草に來し風白蝶と入れ替る
首投げて憩ふクレーン豆の花
揚雲雀ぽかんと湖の残りけり
気を抜けば曲る背骨や囀れる
膝折りて花かたかごと風を待つ
北に置く父系の山河遅桜
百谷に百の彩りほととぎす
寄り添ひて祈りの深し座禅草
青空を濡らす湖夏つばめ



第 31 回桂郎賞俳句部門入選

廃校の散るを急がぬ残花かな
老鶯や日照雨湿りの丸木橋
忘れ去ることもやさしさ牡丹散る
風音の棲む城址や落し文
城址の綻び綴る蝶の昼
山肌へ彩こぼしゆく虹しぐれ
木苺や夫逝くも尚農婦なる
明日へと急ぐ夕日や田水張る
沈まねばならぬ太陽桜桃忌
梅雨蝶に急ぎの用のあるらしき
蛍の夜声やはらかく逢ひにけり
蛍の火濃き闇間より拉致さるる
世に疎きままに老いけり冷奴
風荒るる里捨てられずほととぎす
水打ちて那岐連峰の底に生く

◇特別作品抄◇

湖畔抄

天野みゆき

あさなあさな金魚に餌撒く恙なし
倣ひとて流す古櫛多佳子の忌
灯取虫わが匂毒せに來りしか
仏師の座穢してならじ三尺寢
玉虫に後宮の夢託さむか
手拍子に呉越同舟盆の月
門火焚くおうと声あり見えねども
子三人育てし事実生御魂

風土独語／神蔵器



葛の花岩殿山に鍛垂れ

天野みゆき

天正十年、武田勝頼が織田・徳川連合軍に敗れ、最後に頼ったのは岩殿山の城主小山出信茂であった。しかし、信茂は織田方に寝返り勝頼は受け入れてもらえず進退に困り、結局、天目山を目指して落ちのびて行つた。

以上のように岩殿山の城は、武田家滅亡にかかわる悲史の城であるが、標高六三六・九メートル、安山岩と凝灰岩の基盤に礫岩が乗り急峻、南に桂川、北を葛野川に挟まれた天然の要害であった。小山田信茂は天目山の戦の後、信長によって処刑されているが、今も山頂には烽火台跡があり、馬場の跡、番所跡、馬冷し池等が遺っているそうである。

鍛（鋷とも書く）は、兜や頭巾の左右・後方に垂れ下げ、頸から襟を防御するもの、多くは札（さね）または帯状の鉄板を三段ないし五段下りとして威しつける。葛が繁茂し、さらに生い茂って、嘗ての城のいたるところ、城壁の跡や石垣、切り立った崖の岩肌など、葛は幾重にもおおいつくしなだれ垂れ下っている。眼前のその光景を作者は武士の兜や頭巾の鍛のさまと見たのだ。流石である。

校庭に並ぶバケツの稲たわわ

北島 和装

都内の小学校や幼稚園なども稲作の実習体験を行なっている所が近年かなり多くなって来た。校庭の一隅を花壇のように囲って田圃にしたり、掲出句のように幾つものバケツを用いたりする。

稲は太陽と水と少々の土があれば栽培は出来るが、米という字が八十八と書くように、大変な手間隙と愛情がなければ育たない。それだけに穫り入れ間近の黄熟した稲の穂のたわわな金色の波は子供たちに大きな感動を与える。これこそ生きた教育というものであろう。いくつも並んだバケツが泣かせる。

阿波踊雨の中より豪雨来て

柴田 久子

阿波踊は阿波徳島が本場であるが、戦後、高円寺もなかなか盛んで、この句の阿波踊も高円寺のものようである。基本的なところは同じでも、それぞれの連はそれぞれ異なった衣裳、所作、ふりにも意匠をこらし、男も女も、老人も子供も「踊らにやア、ソン、ソン」と踊りに酔い、踊りに狂う。

雨天決行、少々の雨はものともせず四、五十人の連は次から次へと続く。踊も観客も最高潮に盛り上ったとき、降りしきる雨の中よりゲリラ豪雨が急襲したのだ。さて、阿波踊はどうなったであろうか。（以下略）

風土集



神蔵器選

吉野より京の残暑に戻りけり 京都

西村 雪園

桐一葉 京一条に戻り橋

柴垣に沿ひて野宮蟬しぐれ
蝸や売家の札の大屋敷

柳生

法師蟬 一万石は表高

東京

柿沼 盟子

山靴の音なく消えし楽屋口
比叡山を傾け京の夕立かな

穂孕みの早稲あをあと尖りをり
月曜の午前眠たき残暑かな

東京

奥田 茶々

子規庵の秋の蚊ならば打たず置く
物干しのシャツの片寄る残暑かな

鉄棒の着地決まりて蟬しぐれ
床の間に子規の横顔水引草

雷と一緒に来たり豆腐売り

盆の月浮かべ一葉のミントティー 川崎

北島 和装

無花果を割いて太古の水の声
無花果の熟れて少年から大人

滔滔と玉川上水蟬時雨

月曜日会議時々色鳥来

川崎

松田 延子

天上に雷の一喝受けるかな

芙蓉咲き身近に人の死を悼む

八月の「地獄の門」の前に佇つ
移動図書館より間違ひ電話八月

小学生に時間きかれる猫じやらし

岡山 高村 令子

蛇の衣吹かれつ空を深くせり

草笛や息足りぬ齡持ち歩く

蓮の花かすかな雨の通り過ぐ
囁けるほどの夕風酔芙蓉